

東條 竹秋（とうじょう・ちくしゅう）

1、プロフィール

徳島県出身。東京で小学校校長を経て、弁護士となる。弘前の知人のつてで黒石に疎開する。そこで俳句社「茜」を創立し、終戦後から約 10 年間俳句振興に努める。

<生没>

1888(明治 22)年 12 月 10 日～1960(昭和 35)年5月 18 日

<代表作>

俳誌「茜」刊行

<青森との関わり>

終戦後黒石二庄内に疎開中、俳誌「茜」を創刊。弘前で弁護士活動の傍ら県内外の句友と交流、振興に努めた。

2、作家解説

徳島県徳島市八多町に生まれる。東京高等師範を卒業し、昭和4年板橋町板橋尋常高等小学校校長となる。教員として実務的能力に秀れ(秀で・優れ)、当時としては珍しい教材の指導書を作成し、現場の教師たちに大いに利用された。教職の傍ら中央大学の夜間に通い、法律を学ぶ。昭和 11 年横浜弁護士会に入会をかわきりに弁護士として生活する。

本県との関わりは、東京空襲を避け、昭和 18 年弘前市の時計屋の知人を頼って弘前に疎開する。しかし、その友人宅も手狭なため、温泉のある黒石の二庄内に移る。この時「青荷山人」の号で短歌を作っていた丹羽洋岳と交流を持った。ここに2～3年程住む。知った人もおらず、特に雪深い冬の生活は大変であった。寂しさをなぐさめるために3里の道を歩いて、頻繁に洋岳に会いに行った。洋岳を「仙人」のニックネームで呼んでいた。洋岳も「茜」に投句している。

この時期、俳誌「茜」を創刊する。最初の句会は二庄内で開いているが、交通の便が悪いため5、6人の集まりであった。この後黒石の町の中に転居。近在からも通いやすく句会の人数が増える。昭和 23 年、ここ黒石で娘が誕生している。戦後まもなくは印刷もままならず、経費面で持ち出しが多く苦勞した。

生活を弘前下銀に移し、弁護士の傍ら公証人の仕事もした。句会は自宅の他、長勝寺でも開いていた。住職夫妻須藤喚月、喜美子の縁で、竹秋亡き後、茜吟社の有志等が長勝寺に句碑——城近く 住む幸ありて 花万朶——を建立した。

茜吟社は、蓬田、五所川原など2、3の支部を持つほど盛んな時期もあった。創刊号は昭和 21 年2月で、第2号とあるがこれが最初の俳誌である。竹秋の死をもって茜吟社は絶える。最終刊は昭和 31 年1月。この間 23 冊の俳誌を出版している。戦後まもなくの 10 年間、県内はもとより県外にも広く句友を求めて「茜」を発刊した。戦後の復興を武力でなく文化の力でと願い、俳句を作れと俳誌に掲げられている。

3、資料紹介

○「茜」(時にひらがな、カタカナ書きの号もある)

冊子・謄写、活版印

昭和 21 年2月～昭和 31 年1月

17.2cm×25.1cm(14.2cm×20.3cm)

東條竹秋主宰。疎開先の黒石二庄内で茜吟社「茜」俳誌を創刊する。戦後の復興の気運興隆の願いをこめて、全国に句友を求める。県内はもとより、東北、東京、静岡、四国と遠方からの投句者も多い。

○『俳句の作り方』

出版物

昭和 23 年8月 15 日

12.2cm×9.0cm

東條竹秋著。発行人は蓬田茜吟社支部代表坂本歩洋。携帯に便利なサイズの句作マニュアル本である。